

ガラス瓶 復活に光

近畿の底ぢから

日本精工硝子(大阪)

大阪市はかつてガラス産業が栄えたまちだった。水運が発達し、原料のケイ砂や石灰を運び込みやすかった北区の天満かいわいには戦前、ガラス関連工場が並んでいた。その面影を今に伝えるのが日本精工硝子(同区長柄西1丁目)だ。「ガラス瓶ルネサンス」をうたい、魅力発信を続けている。

レトロなビールや古い町家が散在する大阪府中央区の船場地区の一角に、日本精工硝子の直営店「キュートグラス ショップ・アンド・ギャラリー」がある。大正時代に建てられた町家を再生し、2年前にオープンした。

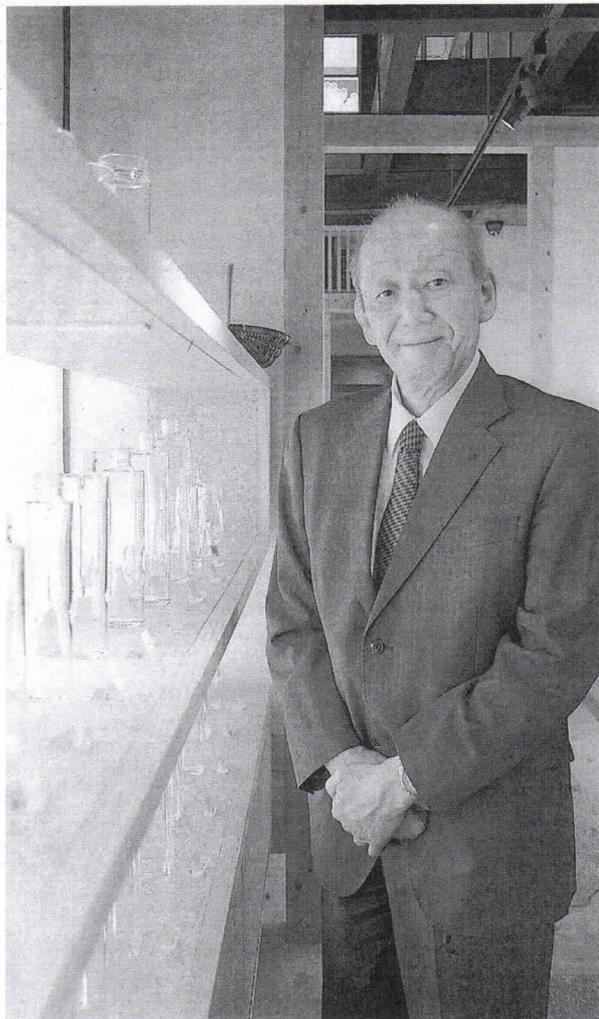
円筒形や角形、ハート形のものもある。「美しいでしよう。この透明感がうちのガラスの特長なんです」。小西慈郎社長(65)がほほえんだ。

1895(明治28)年創業の同社は、60年ほど前から化粧品のガラス容器に着目した。市場縮小などで同業他社が廃業していく中、大手化粧品メーカー各社との取引を柱に事業を続けた。だが、化粧品容器はやがてプラスチックが主流となっていく。

2012年からは海外でも事業をスタートした。透明度の高さやデザイン性が評価され、韓国では約50社が食品や飲料の瓶として採用した。

14年には、自社製ガラス瓶を使った化粧品も発売した。小西社長は語る。「ガラス瓶は工業製品だが、工芸品に近い。リサイクル可能で清潔感や高級感もある。この魅力にいま一度、光をあてたい」

(高松浩志)



「キュートグラス ショップ・アンド・ギャラリー」でガラス瓶を眺める日本精工硝子の小西慈郎社長。大阪府中央区伏見町2丁目

都心に直営店 魅力発信

瓶への印刷技術も磨き、しよゆメーカーが米国で限定販売した「ハローキティ」の瓶も受注した。「今ではアジアを中心に、ロシア、フィンランドなど15カ国まで取引先が増えました」。海外事業部の清水曜介部長(63)は胸を張る。

「悔しかった。それが直営店をつくったきっかけです」。カフェのようなおしゃれな店内では、瓶のなかに花を詰めるハーバリウムの教室を開くなど、ガラス瓶の新たな魅力を発信している。



「キュートグラス ショップ・アンド・ギャラリー」2階で開かれたハーバリウム教室。おしゃれなインテリアとして、人気が高まっている。日本精工硝子提供

日本精工硝子 年商約30億円、従業員数約140人。大阪メトロ・阪急天神橋筋六丁目駅近くの本社所在地にあった工場は現在、三重県伊賀市に移転している。直営店「キュートグラス ショップ・アンド・ギャラリー」(大阪府中央区伏見町2の4の4、電話06・6226・8360)は午前10時～午後5時オープン(土日祝休み)。